組織強化と部落解放をめざす決議（案）

この間３年以上にわたり、新型コロナウイルス感染症対策として、様々な集会やイベントが制限され、日常生活にも大きな影響があったが、この 5 月はじめから季節性インフルエンザと同等の 5 類に移行されることにより、社会活動が通常に戻りつつある。支部大会をはじめ、地域での取り組みも対面で集い、再開される機会が増えている。

しかしこの３年間は、社会的弱者が孤立し、分断が深まった時間でもあった。非正規労働者は職を失い、特に母子家庭の貧困はさらに悪化を極めた。高齢者施設や病院でのクラスター発生を予防するため、施設職員も、入所者もその家族も必死に生き延びてきたのだ。私たちは、この現状の中で助けを必要としている人々に手を差し伸べ、地域のまちづくり運動につなげつつ、世話役活動を再開しなければならない。

ただし、強く元気な人が弱っている人を助けることだけが、世話役活動ではない。強さや弱さもまた多様であり、弱っている人の気遣が優しさや勇気を発揮することもある。

様々な世代、様々な立場の人々が出会い、接触し、話をしていくことが重要だ。人脈をたどり、若い人々との関係もつむいでいこう。

昨年の全国水平社 100 周年記念イベント、その中でも映画『破戒』に描かれた主人公丑松の姿は、1 人の若い教職員の苦悩としても描かれており、昨年公表された京都市「教職員の人権教育に関する意識調査」においても、20 代から 30 代の教職員たちが、部落問題がわからないからこそ、知りたいとする傾向が示された。

知りたいという気持ちが、インターネット上の差別言辞に影響されてはならない。こうした状況においてこそ、私たちが発信し、伝えていかなければならない。自分たちの地域の歴史を見つめ直し、再考する作業。昨年発行された書籍「京都の部落解放運動史－水平社創立 100 年」にも描き切れていない、私たちの地域に生きてきた人々の声からリアルな歴史を掘り起こし、自分たちが何者であるかを知り、尊厳をもって生きていこう。

その誇りを次の世代に伝えることが、部落解放運動の大切さを共有する事にもなる。差別の痛みとともに、人権の尊さを、多くの差別を知らない人たちへ届けよう。

２０２３年６月２日

２０２３年部落解放同盟京都市協議会定期総会